



Title	アーネスト・ヘミングウェイ著『兵士の故郷』における喪失の物語
Author(s)	瀬名波, 栄潤
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 156: 37 (左) -59 (左)
Issue Date	2019-01-11
DOI	10.14943/bgsl.156.137
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/72451">http://hdl.handle.net/2115/72451</a>
Type	bulletin (article)
File Information	156_02_senaha.pdf



[Instructions for use](#)

## アーネスト・ヘミングウェイ著 『兵士の故郷』における喪失の物語<sup>1</sup>

瀬名波 栄 潤

### はじめに

アーネスト・ミラー・ヘミングウェイ (Ernest Miller Hemingway) にとって、キリスト教は男を表現する手段であった。ヘミングウェイの初期短編集『われらの時代に (*In Our Time*)』(1925/1930) が聖公会祈祷書の賛美歌からの一節 “Give peace in our time, O Lord.” からの引用であることから明らかなように、そこには戦時における希望と絶望が入り混じった男の祈りがある。特に、様々な伝統的価値観が逆転する第7章の『兵士の故郷』(1924年4月執筆) は、男らしさを演出する舞台であるはずの戦争が男を破壊し、宗教もまた男を破壊する。

『兵士の故郷』はこれまで幾つかの事実誤認が指摘され、伝記的根拠も曖昧なままに「喪失文学」としてヘミングウェイの内面理解のために言及されてきた。ヘミングウェイは1918年5月に渡欧シイタリア軍付赤十字要員として従軍を果たしたものの7月にフォッサルタで足を負傷、1919年に帰国するが1年で故郷を去っている。おそらく生年が同じ主人公ハロルド・クレブスも第一次世界大戦に参加、負傷し、1919年の夏に帰国、しばらくして故郷を

---

<sup>1</sup> 本稿は、2015年12月19日北海学園大学で開催された日本アメリカ文学会第25回北海道支部大会シンポジウム『キリスト教の中のアメリカ文学～神の不在と介在～』での発表「Was Hemingway a Christian?～メソジストになろうとした男～」に加筆修正したものである。

後にする。確かにヘミングウェイとクレブスの経験は重なる。しかし、この重複は大雑把で一致していない。クレブスの家族構成はもとより、故郷はイリノイ州ではなくオクラホマ州であるし、しかも故郷を出たクレブスが向かうのはトロントではなく、ヘミングウェイが見習い記者になったカンザス・シティである。何よりもクレブスは大学を卒業している。

大学進学を検討していたヘミングウェイは、結局はそれを諦め、高校を卒業した秋に「カンザス・シティ・スター」紙に就職している。そして『兵士の故郷』では、自身が経験できなかった大学生活を創作し、戦争と宗教が男を喪失させる物語を演出する。ヘミングウェイの分断された内面を結ぶ糸口を、これまで看過されてきた失われた学歴「メソジスト大学」に探る。

## I. 若者と戦争

### 1. ヘミグウェイと戦争

ヘミングウェイは1899年7月21日、イリノイ州シカゴ郊外のオーク・パークに生まれた。父クラレンス・エドモンド・ヘミングウェイは実直な町医者であり、母グレイス・ホール・ヘミングウェイは声楽家としての訓練を受けた音楽好きであった。ヘミングウェイ家は、いわゆる中産階級の家庭環境にあったと言えよう。<sup>2</sup>

1906年には、ヘミングウェイ家はオーク・パークに家を新築し、ヘミングウェイはそこから小・中学校に通った。そして1913年、オーク・パーク高校

---

<sup>2</sup> ヘミングウェイの伝記情報については Kenneth S. Lynn *Hemingway* (Cambridge, Harvard UP, 1987), James R. Mellow *Hemingway: A Life Without Consequences*. (Cambridge, MA: Da Capo P, 1992), James, Nagel ed. *Ernest Hemingway*. (Tuscaloosa: U of Alabama P, 1996), Michael Reynolds *The Young Hemingway*. 1986. (New York: Norton, 1998). Carlos Baker, *Ernest Hemingway: The Writer as Artist* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1952), Carlos Baker, *Ernest Hemingway: A Life Story* (New York: Charles Scribner's Sons, 1969)に加え、日本ヘミングウェイ生誕100年日本委員会編『ヘミングウェイ年譜』(1999年)、山本健一『ヘミングウェイ文学の潮流一人と作品』(岐阜市立女子短期大学研究紀要第61輯(平成24年3月, 9-16)などに基づく。

に進学すると、そこでボクシングやフットボールなどのスポーツに熱中したが、一方で文学に目覚め、古典を読むと共に、学内季刊文芸雑誌「タビュラ」に短編小説などを発表するようになる。しかし、文学は不道德であると考え、保守的な両親との人間関係は悪化していったと言われている。

1917年4月、アメリカ合州国は第一次世界大戦に参戦した。アメリカの若者はこぞって戦争に志願したという。ヘミングウェイは18歳の高校卒業を前にして、第一次世界大戦下のヨーロッパ戦線で兵役に従事したいと考え志願するが、身体検査で不合格となる。それでもなお、親の勧める大学進学を拒否し、ミズーリ州カンザス・シティーにある「カンザス・シティー・スター」という地方新聞社の見習い記者の職を得て、文章を書く仕事を始める。1年足らずではあったが、新聞紙上に記事を掲載する傍ら、文章の書き方や表現の技術に関する訓練を通して、作家という仕事への志向を強めた。

1918年4月、ヘミングウェイはアメリカ赤十字の志願兵募集に応募し合格、「カンザス・シティー・スター」社を辞職した後、イタリア軍付赤十字要員としてミラノに到着する。救急車の輸送員として北イタリア前線フォッサルタに従軍中、敵の迫撃砲攻撃と機銃掃射で脚部に227もの破片を受ける負傷をし、ミラノ陸軍病院に3か月入院した。1919年、生まれ故郷のオーク・パークに戻ったが、戦場で負傷した時の後遺症で不眠症に悩むようになった。

1920年からは、カナダのオンタリオ州トロント市に移り、「トロント・スター・ウィークリー」誌や「トロント・デイリー・スター」新聞の記者やシカゴの「シカゴ・トリビューン」新聞の事件記者を体験した。1921年には、作家シャーウッド・アンダーソンとの交流があり、また9月3日にはハドリー・リチャードソンと結婚し、創作活動に励むようになる。1922年には、アンダーソンの紹介でパリに渡り、アメリカ人女性作家ガートルード・スタインや詩人で批評家でもあるエズラ・パウンドとも知り合い、二人から短編小説の文体や表現技法を学ぶこととなった。このようなパリにおける修業時代を過ごした後、1923年9月に *Three Stories and Ten Poems* を300部、パリで私家出版。長男 John Hadley Nicanor Hemingway (10/10-12/01/2000) が生まれる。

1924年1月パリに戻り、いわゆる本格的な「パリ修業時代」が始まる。定職としてはフォード・マドックス・フォードが創刊した『トランスアトランティック・レビュー』誌の編集スタッフという仕事に就いた。3月頃とされているが、ウィリアム・バード社主のスリーマウンティンズという、地下室で手刷りの限定版を手がける出版社から小品18編を集めたパリ版 *in our time* (『ワレラノ時代ニ』) を出版。初版170部32頁という小冊子だったが、アメリカの批評家で小説家でもあったエドムンド・ウィルソンが注目し、書評を『ダイアナ』誌10月号に発表した。しかし、パリ版は商業的には成功せず、4月には短編『ワーク・イン・プログレス』(後に『インディアン・キャンプ』と改題発表)が『トランスアトランティック・レビュー』誌に掲載された。夏にはスペインを旅行し、パンブローナで闘牛に魅せられる。12月には『医師と医師の妻』も発表した。

1925年10月には、*In Our Time* 『我らの時代に』として再編集しアメリカで1335部を出版する。1925年版は16章からなり、それぞれに断片(スケッチ)が付され対称型をなした。1930年版では、新たに序章を加え、15章構成に組み替え、結びを付している。これはのちにヘミングウェイ文学の原点とされる。その一つが、本稿で取り上げる『兵士の帰郷』である。

## 2. クレブスと戦争

『兵士の帰郷』では、主人公クレブスの経歴が具体的に描かれる。以下は、彼の参戦から帰郷までの様子である。

[Krebs] enlisted in the Marines in 1917 and did not return to the United States until the second division returned from the Rhine in the summer of 1919.

...

By the time Krebs returned to his home town in Oklahoma the greeting of heroes was over. He came back much too late. ... People seemed to think it was rather ridiculous for Krebs to be getting back so late, years after the war was over. (69, underline mine)

しかしながら、この記述は研究者に混乱を招いた。Horace Jones は、これはヘミングウェイが海兵隊と陸軍を混同した事実誤認だとした。

“In his first paragraph, Hemingway writes: ‘He enlisted in the Marines in 1917...’ This is the only time throughout the entire story that the word ‘Marine’ is used. Hereafter, Krebs is perpetually called a ‘soldier’ who served in the ‘army.’ Thus, Hemingway errs, for to refer to a U.S. Marine in these terms is anathema.”<sup>3</sup>

Matthew Stewart もまた、“Harold Krebs has returned to his small Oklahoma town significantly later than his fellow hometown veterans.”として、クレブスの帰国が不自然に遅いことを指摘した。<sup>4</sup>

George Monteiro は文学的な誇張表現だと擁護する。

If Hemingway errs in the matter, it is not in any literal sense, namely by getting his duties wrong, mistakenly expanding a period lasting ten months into one of “years.” It is hardly likely that Hemingway (or his editors) could have missed such a discrepancy, if the matter turned on dates and months. It is far more likely that Hemingway’s “mistake” serves a little literary effect. The context in which the details are presented makes this apparent, for it guides the reader to the clearly ironic tone which controls his interpretation of facts as presented.<sup>5</sup>

さらに、Monteiro の調査によると、クレブスの物語と実在した第2師団は矛盾なく一致する。実際に、1917年9月21日に第二師団が陸軍に設置され、同年10月26日には海兵隊と共同するようになると、海兵隊の大將が、2度師団の指揮をとる。1918年11月11日にドイツと連合軍が休戦協定。第2師団はドイツを1919年4月まで占領し、7月に帰国している。その間、ソ

---

<sup>3</sup> 17. Horace P. Jones, “Hemingway’s ‘Soldier’s Home,’” *Explicator*, 37.4 (1979)

<sup>4</sup> 61. Matthew Stewart. *Modernism and Tradition in Ernest Hemingway’s “In Our Time”*. Rochester, NY: Camden, 2001.

<sup>5</sup> 50-51. George Monteiro. “Hemingway’s Soldier’s Home.” *Explicator* 40.1 (Fall, 1981), underline minee

ワソンやアルゴヌを転戦した。<sup>6</sup>

テキストでも、クレブスはソワソン、シャンパーニュ地方、サン・ミーエルそしてアルゴヌで戦ったとある。

“At first Krebs, who had been at Belleau Wood, Soissons, the Champaign, St. Mihiel and in the Argonnes did not talk about the war at all.” (69)

“He sat there ... reading a book on the war. It was a history and he was reading all the engagements he had been in. ... He had been a good soldier.” (72)

つまり、クレブスは、海兵隊として入隊し、1917年9月に組織され1919年7月に解散帰国した、海兵隊指揮下で陸軍と海兵隊の混合である陸軍第2師団に所属していたとなる。テキストと史実は一致しており、クレブスが1919年の夏に帰国したこととつじつまが合う。クレブスの帰郷は史実に基づいたものであり、ばかげた (ridiculous) ことではなかったのだ。

だが、オクラホマ州に帰郷したクレブスに英雄としての歓迎は待っていなかった。

Krebs acquired the nausea in regard to experience that is the result of untruth or exaggeration, and when he occasionally met another man who

---

<sup>6</sup> The 2nd Infantry Division was first constituted on 21 September 1917 in the Regular Army. It was organized on 26 October 1917 ... [It] was composed of ... the 4th Marine Brigade, which consisted of the 5th Marine Regiment, the 6th Marine Regiment and various supporting units. Twice during World War I the division was commanded by US Marine Corps generals, the only time in U.S. military history when Marine Corps officers commanded an Army division. ... The 2nd Infantry Division first fought at the Battle of Belleau Wood and contributed to shattering the four-year-old stalemate on the battlefield during the Chateau-Thierry campaign that followed. ... The division went on to win hard-fought victories at Soissons and Blanc Mont. Finally the Indianhead Division participated in the Meuse-Argonne Offensive which ended any German hope for victory. ... On 11 November 1918 the Armistice was declared, and the 2nd Infantry Division entered Germany, where it assumed occupation duties until April 1919. (“2nd Infantry Division returned to U.S. in July 1919. (3rd Infantry Brigade, 2nd Infantry Division”, Wikipedia: [https://en.wikipedia.org/wiki/3rd\\_Infantry\\_Brigade,\\_2nd\\_Infantry\\_Division](https://en.wikipedia.org/wiki/3rd_Infantry_Brigade,_2nd_Infantry_Division))

had really been a soldier and they talked a few minutes in the dressing room at a dance he fell into the easy pose of the old soldier among other soldiers: that he had been badly, sickeningly frightened all the time. In this way, he lost everything.” (70 underline minee)

故郷で歓迎されず、喪失感のみを経験する Krebs は、他の兵士と話す際に、老兵のように“easy pose”を取る。まるで、片足を負傷してかばって立っているように見える。これを、Paul Smith はイタリアのヘミングウェイ同様に足を負傷している証だと指摘する。<sup>7</sup>

恋愛においても、クレブスは帰郷してから女性との接触を避けている。

You didn't need a girl unless you thought about them. He learned that in the army. ... He liked the girls... He liked to look at them all, though. It wasn't worth it. Not now when things were getting good again. (72)

これも、ヘミングウェイと類似する。ヘミングウェイはイタリア負傷時にアグネス・フォン・クロウスキーと恋愛、帰国後結婚するつもりでいた。しかし、その後彼女から別離の手紙が届き破局。帰郷後しばらくは心身ともに癒しの時間を必要としていた。1924年執筆の本テキストで、派兵先のドイツやフランスの女性を娼婦のように描いているのは、アグネスに対する当時の純愛と失恋後の恨みを表し、そして自伝的要素を打ち消すための創作かもしれない。

多々相違点はあるものの、クレブスはヘミングウェイと一致するキャラクターとして描かれているように思われる。事実、多くの批評家は、クレブスをヘミングウェイのダブルとして言及する傾向がある。

## II. 故郷と宗教

ヘミングウェイとクレブスの故郷は類似している。もっとも共通している

---

<sup>7</sup> 70. Paul Smith. *A Reader's Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Boston: Hall, 1989.



のは、二人とも 19 世紀末からの都市化の影響を受けた時代と街に生きたということだ。

まず、第三次大覚醒（Third Great Awakening）は、1850 年代後半から 1900 年代までの米国史上での宗教活動が活発になる期間で、敬虔なプロテスタントの教派に影響を及ぼし、強い社会的な行動主義の色合いを持つようになる。

1858 年、多くの都市で覚醒運動は南北戦争によって中断された。その一方で南部においては、南北戦争は特にロバート・E・リー將軍の軍隊で信仰復興を刺激した。戦争の後、ドワイト・ライマン・ムーディー（後に、シカゴでヘミングウェイの祖父アンソンの友人になる）は、ムーディー聖書学院を設立することによって、信仰復興運動をシカゴの彼の活動の最大の強調点とした。なお、アンソン・ヘミングウェイは、1877 年から 1888 年まで、シカゴの YMCA 事務局で働き、ムーディーの影響を強く受けたと言われている。

19 世紀後半の金びか時代の金権政治は、社会的福音運動の伝道者と革新主義時代の改革派から厳しい攻撃を受けた。歴史家のロバート・フォーゲルは、彼らの多くの改革には、児童労働にかかわる戦い、強制的な初等教育、工場での搾取からの女性の保護が含まれているとしている。加えて、アルコールの禁止のための撲滅運動があった。主要なプロテスタントの宗派はすべて、アメリカ国内と世界中で増加している伝道の活動を後押しした。宗派に関連した大学は、カリキュラムの数、サイズ、品質ともに急速に拡大した。特定宗派の若者の集団のエプワース・リーグ（メソジスト）とウォルサー・リーグ（ルター派）と同様に、YMCA は多くの都市で重要な位置を占めた。1880 年、救世軍の教派はアメリカに到着した。その神学は第二次大覚醒の間に言い表された理想に基づいていたが、貧困への焦点は第三次大覚醒のものであった。<sup>8</sup>

---

<sup>8</sup> ちなみに、第一次大覚醒は 1730 年代-1750 年代、第二次大覚醒は 1800 年代-1830 年代、第四次大覚醒は 1960 年代-1970 年代に分類されている。

## 1. ヘミングウェイの故郷と宗教

ヘミングウェイは、文化・政治的保守性と革新的宗教性が同居するイリノイ州オーク・パークで生まれ育った。

The bitterness of growing up in a Homeric battlefield was very real and became one of the foundations of Hemingway's thought. Born into a respected and respectful Oak Park family of high Victorian temper, young Ernest began to think of the village world as a neighborhood of traditionalism that enclosed him on all sides, religious, political, and cultural.<sup>9</sup>

Larry Grimes が言うように, “The Hemingway family acted out its religious life deeply influenced by this powerful, mainline, Protestant ethos.”であった。<sup>10</sup>

On his mother's side of the family, according to Grace Hall Hemingway, his great-great-great grandfather, Edward Miller, MusD., revolutionized Church of England music from his post as organist at Doncaster. Ernest's great-great grandfather, William Edward Miller, gave up career as musician to royal courts, as well as rare Cremora violin, to become an itinerant Methodist preacher. ... And Ernest's maternal grandfather, Ernest Hall, although an active member of Episcopal Church, was a great supporter of the Salvation Army and the Methodist Mission Board, a true descendant of the fiery William Miller. ...

Grace Hall Hemingway manifested religious temperament similar to her forbears...<sup>11</sup>

---

<sup>9</sup> 97. Carlos Azevedo. “Oak Park as the Things Left Out: Surface and Depth in ‘Soldier’s Home.’ James Nagel, ed. *Ernest Hemingway: The Oak Park Legacy*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1996.

<sup>10</sup> 44. Larry Grimes. “Hemingway’s Religious Odyssey: The Oak Park Years”. James Nagel, ed. *Ernest Hemingway: The Oak Park Legacy*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1996. 37-58.

父方の会派は、母方とは全く異なっていたと Grimes は言う。

The Hemingway side of the family had very different religious temperament. They were pious but not full of religious sentiment, stern moralist in favor of saving souls but not the kind of people to want a church service “thrown open.” ... This (literary/orthodox) understanding of religion was most certainly reinforced for Anson Hemingway during his tenure as secretary of the Chicago YMCA (1877–1888). During its formative years the Chicago YMCA was deeply influenced by Anson’s friend and spiritual mentor, evangelist Dwight Moody. ... (Clarence’s) three sons, it should be noted, cut their religious teeth during his Moody/YMCA years. One, Willoughby, became a medical missionary to China; another, George, became a founding member and outstanding lay leader at the Third Congregational Church in Oak Park; third, Clarence, Ernest Hemingway’s father, became an Oak Park doctor who ran his practice like the missionary he sometimes thought he should have become. Like his brother George, Clarence was a member of the Third Congregational Church. Records show that Clarence and Grace did not completely sever their ties with the First Congregational Church between 1903 and 1909 and Adelaide Hemingway practiced actively in the Women’s Aid Society at the Third Congregational Church.<sup>12</sup>

父方は会衆派系（コングリゲーションナリスト）、母方はメソジスト系、家族としては会衆派に属した。メソジストはもともと聖公会（英国教会）の分派で、監督（ビショップ）—司祭—執事の位階制度（ヒエラルキー）があり、厳密にいうとピューリタンではないが、禁酒禁煙を強調するなど、ピューリ

---

<sup>11</sup> 44. Larry Grimes. “Hemingway’s Religious Odyssey: The Oak Park Years”. James Nagel, ed. *Ernest Hemingway: The Oak Park Legacy*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1996. 37–58.

<sup>12</sup> 45. Larry Grimes.

タンのであり、他の教派との連携も盛んだった。会衆派には位階制はなく、個々の教会の完全独立性を主張し、個人の決断を尊重する。ピューリタン革命の中心になったのも、メイフラワー号でアメリカに渡ったのも、会衆派だった。

高野泰志の『アーネスト・ヘミングウェイ、神との対話』によると、ヘミングウェイは、1889年10月1日にオーク・パークの第一会衆派教会で、ウィリアム・E・バートンにより洗礼を受け、1911年4月16日（復活祭）に第三会衆派教会に移る（両親は1903年に移動済み）も、1915年5月6日には姉のマーセリンとともに第一会衆派教会に戻る。ヘミングウェイはそのこのプリマスリーグに加わり、様々な教会行事に加わる。大きな変化は、1918年7月、イタリアの野戦病院でジュセッペ・ビアンキ神父により終油の秘蹟を受けたことである。ヘミングウェイは、これをカトリックの洗礼であったと後に主張する。ともあれ、1921年にはハドリーとメソジスト派の教会で挙式を行い、1924年には長男の洗礼を（カトリックとプロテスタントの中間として自らを位置づける英国国教会の）パリ聖ルカ聖公会で行う。1925年には、カトリック教徒を主人公とした『日はまた昇る』を書き始める。ヘミングウェイは一貫してキリスト教徒ではあるが、教派は一貫していない。

カトリックへの信奉はその後増す。1926年1月には、アーネスト・ウォルシュ宛の私信で、自分がキリスト教徒であると明言。11月～12月には、執筆中の「身を横たえて」で、自らの分身とされる主人公ニック・アダムスがカトリック教徒であることを初めて明らかにする。

## 2. クレブスの故郷と宗教

主人公の故郷オクラホマ州は、母の介在と父の不在によりクレブスにとって異郷となる。

“Soldier’s Home” is a tale of individual affirmation and the loss of happiness and freedom in a female-ruled household. ... Krebs’s mother knows “how weak men are” (115), and Krebs’s father is never present.<sup>13</sup>  
『兵士の故郷』は、Carlos Azevedo (1968) が言うように、偽善に満ちた世界

だ。しかも母親と彼女の宗教・人生観が支配する世界へと変貌している。帰郷後の男の生きる道として、母親は「新たな目的を持つ」、「仕事を得る」、「結婚する」、そして「社会貢献」をクレブスに要求・期待する。ありふれたヴィジョンに見えるが、クレブスの心情は無視され、メソジスト的理念（規律を重んじた中産階級・労働者階級の幸福の追求）のみが強調される。つまり、このオクラホマ州の架空の街は、「医師とその妻」や「身を横たえて」のニックの母親にもあるように、ヘミングウェイが母グレースに抱いていたイメージを投影して創作しているように思える。

ハロルド・クレブスの家族は、彼がメソジスト大学を卒業していることから教派は明らかだ。メソジスト教会は、プロテスタント教派の一つで、産業革命の進展の裏面で、多くの労働者が没落し、酒浸りになるなど、スラム街での希望の持てない生活に陥っている中誕生した。

ジョン・ウェスレー（1703-91年）は、父の代からの英国国教会司祭でしたが、学生指導員（チューター）をしていたオックスフォード大学で、同志と共に厳格な時間表に従う几帳面な生活をしていましたので、「几帳面屋（メソジスト）」とあだ名されていました。ウェスレーは、労働者たちの困窮に目を向けてこれに同情し、また祈りのうちに神の恩恵により自分が聖化されたという、ある種の回心を体験したこともあって、民衆の中に身を投じました。彼は、禁酒など生活の改善と信仰復興（リバイバル）を訴えました。…

メソジスト教会も、その後アメリカで大いに発展し、やがてはバプティスト派と並ぶアメリカの二大教派の一つになります。<sup>14</sup>

メソジスト派は、禁酒運動などを含めて、生活の聖化や完成を目指す努力を強調した。人間は自分の自由な意志により、神の救いを受け入れることを

<sup>13</sup> 103. Carlos Azevedo. "Oak Park as the Thins Left Out: Surface and Depth in 'Soldier's Home.'" James Nagel, ed. *Ernest Hemingway: The Oak Park Legacy*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1996. 96-107. \*Richard B. Hovey. *Hemingway: The Inward Terrain*. Seattle: U of Washington P, 1968. 43.

<sup>14</sup> 210-12. 山我哲雄. 『キリスト教入門』. 岩波ジュニア新書, 2014年.

拒むこともできる、という考えだ。また、メソジスト派から1865年に分離したのが「救世軍」だ。貧民街でより「戦闘的」な大衆伝道や救貧活動などの社会事業を展開するために、具体組織の新教派を、ブースはロンドンで立ち上げた。一般信徒は「兵士」と呼ばれ、牧師は「士官」、最高位は「大将」。男女とも軍服を着用し、軍旗を掲げて「野戦」と呼ばれる伝道活動や慈善事業に従事する。<sup>15</sup>

クレブス家の宗教は典型的なメソジスト派であった。ハロルドの母親は、傷心の息子に以下のように言い放つ。

“God has some work for every one to do,” his mother said. “There can be no idle hands in His Kingdom.”

“I’m not in His Kingdom,” Krebs said.

“We are all of us in His Kingdom.” (“SH” 75)

Robert Jones が言うように、“Krebs was brought up by parents who accepted without question the Midwestern form of the Protestant work ethic: ‘Your father doesn’t care what you start in at,’ his mother tells him. ‘All work is honorable as he says. But you’ve got to make a start with something.’” だった。<sup>16</sup> クレブス家の人生規範はキリスト教に基づいていた。

### Ⅲ. 大学と宗教

#### 1. アメリカの宗教と反知性主義

アメリカは、ヨーロッパという旧世界との対比で、自らの地を新世界と考える傾向がある。ヨーロッパでは、オックスフォード大学やケンブリッジ大学をはじめ、大学の創立理由と宗教は密接な関係にあった。ヨーロッパは、知的で文化的だが、頹廢した罪の世界である。森本あんりが言うように、大学とは元来、宗教者を教育・育成する旧世界の権威主義の権化なのだから、

---

<sup>15</sup> 213. 山我哲雄。ブースとは、救世軍創立者にして初代大将のウィリアム・ブース(1829-1912)のこと。

<sup>16</sup> 516. Robert Jones. “In Defense of Krebs.” *SSF*.

新世界アメリカでは「学問」はそぐわないものであったはずだ。アメリカのキリスト教精神の原点が「反知性主義」なら、「大学」は悪の巣窟であるはずだ。森本によれば、アメリカはそこを脱して新しい世界を作ったのだから、人間の作り上げたそういう文化的な知よりも、聖書が説く神的な原初の知へと回帰したい、というのが彼らの願いなのである。反知性主義は、「学者」と「パリサイ人」つまり当時の学問と宗教の権威者を共に正面から批判したイエスの言葉に究極の出発点を持つ。<sup>17</sup> アメリカ合衆国が大学の国になったもう一つの理由が、国内伝道運動であった。<sup>18</sup> それは、1800年以後、その関心を西部に集中した。(イエール大学やニュージャージー大学(現プリンストン大学)の卒業生からなる)会衆派(コングリゲーションナリスト)たちと長老派(「プレスビテリアン」と呼ばれるカルビニズムに基づくプロテスタントの一派)たちのあいだで、多くの西部の町や村が、西部にあることによる自然の困難を背負ったのである。<sup>19</sup>

こうした大学設立事業のもっとも積極的な行動主体は、キリスト教の諸教派であった。オハイオ州ほど生産的だった州は少ない。オハイオ州には長老派(プレスビテリアン派)、会衆派(コングリゲーションナリスト派)、米国聖公会(エピスコパル派)、浸礼派(バプティスト派)があり、会衆派のオーバーリン大学やマリエッタ大学をはじめ、北米合同長老教会(ユナイテッド・プレスビテリアン派)、ローマ・カトリック教会、メソジスト派、ルーテル派、同胞教会(ユナイテッド・プレズレン派)、ドイツ改革派、スウェーデンボリ派(スウェーデン・ボルギアン派)、同クリスチャン派、ディサイプル派などの大学が1850年以前に設立された。<sup>20</sup>

大学設立が最も遅かったのは、当然聖職者が学問を持つことに心底から敵

<sup>17</sup> 85. 森本あんり、『反知性主義：アメリカが生んだ「熱病」の正体』。新潮選書、2015年。

<sup>18</sup> ここで使う「大学」とは、モリル・グラント法(1862年制定)による「university」ではなく「college(カレッジ)」を主に指す。

<sup>19</sup> 71. Frederick Rudolph. *The American Colleges and Universities*. Athens: U of Georgia P, 1962. Trans. 1990.

<sup>20</sup> 72-73. Frederick Rudolph.

意を持っていた教派であったが、中でもメソジスト派とバプティスト派は大学設立運動に反対した。特に、メソジスト派は、大学で聖書を通して学ぶより経験によって学習することをよしとした。<sup>21</sup> アメリカのユニヴァーシティーにおける奉仕の理想が、一部はその開花のタイミングによることは疑えない。というのも、アメリカにおけるユニヴァーシティーは、米西戦争(1898)と第一次世界大戦(1914-1918)の間の年月に著しく人気を高めたのだが、この時代はいわゆる進歩主義と呼ばれる精神が全米を満ちた時期だった。進歩主義の重要な表出は、ある種の中流階級の義務感として、アメリカ社会の問題や見通しに新しい意味を与えようという精神として現れた。進歩主義の精神とユニヴァーシティーの概念が同時に広まったことは、もちろん双方における奉仕の要素を強める傾向となった。<sup>22</sup>

## 2. ヘミングウェイと大学

高校卒業後の進路選択の一つとして、大学進学があった。結局は、親への反抗心から「カンザス・シティ・スター」紙の見習い記者として働くことになるが、一年後には赤十字軍に志願し参戦する。記者になることは、ヘミングウェイにとって本望ではなかったのかもしれない。Linda Wagner-Martinは、1916年夏頃、つまり高校卒業1年前のヘミングウェイの父の期待とヘミングウェイの抵抗を以下に説明し、イリノイ大学とコーネル大学を進学先に検討していたことがわかる。

Ernest Hemingway's parent hoped that their gifted son would attend college. But in the summer of 1916, with his high school graduation only a year away, Ernest found Kipling's "Outsong" ... running through his head together with a listless comparison of Illinois and Cornell universities (Letters to Emily Goetsmann).<sup>23</sup>

進路に揺れるヘミングウェイは、高校卒業直前の1917年4月にはイリノイ

---

<sup>21</sup> 74. Frederick Rudolph.

<sup>22</sup> 331. Frederick Rudolph.

<sup>23</sup> 87. Linda Wagner-Martin. *A Historical Guide to Ernest Hemingway*. Oxford: Oxford UP,



大学でジャーナリズムを専攻ことに決めかける。

That was in April of 1917. American had just entered war, but in Oak Park High School, the impact had not yet been felt. The school magazine said that in the fall Hemingway was going to the University of Illinois to major in journalism. His class prophecy began with war references in which no classmates were killed or wounded; they had all become quite rich and successful.<sup>24</sup>

しかし、高校卒業直後の1917年夏、「カンザス・シティー・スター」紙への見習い修業が内定し未来への複数の選択肢が用意されていたヘミングウェイの態度に変化が起きる。

It was in the summer of 1917 that Hemingway began to exhibit the early signs of rebellion against his parents and their conventional values. He was unsettled about the future, uncertain about taking the Kansas City job. By August 6, ... So he informed his grandfather Anson ...: "I am not going to the University of Illinois this fall."<sup>25</sup>

コーネル大学とイリノイ大学を諦め、ヘミングウェイの進路は就職か兵役に絞られる。1917年秋のヘミングウェイの心情について、Michael Reynoldsは“Hemingway did not reach the university that fall of 1917, for by that time boys he knew were volunteering for the war as soon as they turned nineteen.”と説明する。<sup>26</sup>しかし、父親は許さなかった。父クラレンスは、姉が通うオーバーリン大学（Oberlin College）を希望していた。ヘミングウェイの心は、「シカゴ・トリビューン紙」への就職とイリノイ大学への進学の間で揺れていたが、決心はつかないでいた。James R. Mellowも同時期のヘミ

---

2000. This information is based on Ernest Hemingway's letter to Emily Goetsmann, July 13, 1916. Hemingway Collection. JFK Library, Boston.

<sup>24</sup> 87. Linda Wagner-Martin.

<sup>25</sup> 39. James R. Mellow. *Hemingway: A Life Without Consequences*. Cambridge, MA: Da Capo P, 1992.

<sup>26</sup> 14. Michael Reynolds. *The Young Hemingway*. 1986. New York: Norton, 1998.

ングウェイ父子の対立を記している。

Clarence Hemingway refused to allow his son to volunteer, as some of Ernest's classmates had done. He wanted Ernest to go to Oberlin, where Marcelline was already enrolled. But Hemingway objected. ... He had thought of applying for a job on the *Chicago Tribune* and could not make up his mind whether to enroll at the University of Illinois. It was an unsettling time.<sup>27</sup>

さて、1833年創立のオーバーリン大は会衆派と軌を一にする長老派系の大学で、かなりリベラルな大学であったようだ。また、1865年には全国で初となる音楽学部（Oberlin College Conservatory of Music）を設置している。

A Presbyterian minister and a missionary founded Oberlin in 1833. The duo, the Rev. John J. Shipherd and Philo P. Stewart, became friends while spending the summer of 1832 together in nearby Elyria. They discovered a mutual disenchantment with what they saw as the lack of strong Christian principles among the settlers of the American West. They decided to establish a college and a colony based on their religious beliefs, “where they would train teachers and other Christian leaders for the boundless most desolate fields in the West.”

Oberlin College Conservatory of Music, founded in 1865, is the nation's oldest continuously operating conservatory, and the only major music school in the country associated with a preeminent liberal arts college. Since its founding, the conservatory has continued its proud tradition of “firsts.”<sup>28</sup>

全米初の音楽学部設立以外にも、全米初は多くある。1892年には音楽史と音楽鑑賞の専任主任を配置し、1921年には音楽教育の学士課程も全米で初めて

---

<sup>27</sup> 35. James R. Mellow. *Hemingway: A Life Without Consequences*. Cambridge, MA: Da Capo P, 1992.

<sup>28</sup> <https://www.oberlin.edu> 参照。

設置している。1837年には女性を受け入れ、1844年には黒人も受け入れた。いずれも国内初であった。卒業生は、参政権など女性の権利を拡大するための活動や奴隷制度廃止運動で指導的な役割を果たしてゆくことになる。1900年までに専門職を得た女性のうち、3分の1がオーバーリン大学の卒業生であった。オーバーリン大学はまた、南部から逃亡してきた奴隷たちを北へ送り出す「地下鉄道」の重要な拠点にもなっていた。<sup>29</sup> 何よりも、オーバーリン大学は、父の母校であり、姉のマーセリンはその音楽学部に進学していた。オーバーリン大学進学は、ヘミングウェイ家の伝統と言っても過言ではなかった。

The question which was of more pressing concern to him during his final months in high school had to do with going to college. Marcelline had elected to enroll at Oberlin, and Dr. Hemingway definitely wanted Ernest to accompany her. Studying at Oberlin was a Hemingway tradition, which he felt his son should help to perpetuate. Hemingway disagreed.

He wanted to do something more exciting, like working on a newspaper.<sup>30</sup> ヘミングウェイは大学進学を断念し、兵役願望は翌年に持ち越されることになった。

### 3. クレブスと大学

クレブスの進路は、テキストの冒頭において紹介されている。メソジスト系の大学に進学し、男子学生社交クラブ (fraternity) に加入。<sup>31</sup> 帰郷後、「クラリネットを演奏していた」ということは、大学で音楽系の活動をしていた可能性がある。大学からすぐに海兵隊に入ったことはテキストの通りだが、大学を卒業したかどうか不明。帰郷後、当時、中西部ではシカゴやセントルイスに次ぐ大都市で、ミズーリー川以西への入り口にあたるカンザス・シティ

<sup>29</sup> 183. 森本あんり『反知性主義：アメリカが生んだ「熱病」の正体』新潮選書、2015年。

<sup>30</sup> 67. Kenneth S. Lynn. *Hemingway*. Cambridge, Harvard UP, 1987.

<sup>31</sup> 「fraternity」には、「大学の男子学生社交クラブ」の以外に、「宗教団体」の意味もある。テキストからは判別できないが、メソジスト系大学の「男子学生社交クラブ」であることから、いずれにせよ宗教色の濃い集団だったと言える。

へ職を求める。

Krebs went to the war from a Methodist college in Kansas. There is a picture which shows him among his fraternity brothers, all of them wearing the same height and style collar. (69)

By the time Krebs returned to his hometown in Oklahoma... (69)

In the evening, he practiced on his Clarinet, ... (70)

He would go to Kansas City and get a job ... (77)

実際の出来事を活用して創作する“factfiction”作家と知られるヘミングウェイが、クレブスの出身大学を実在の大学に発想を得たのかは、ヘミングウェイに進学願望があったことを前提に考えると重要である。この謎を解くキーワードは、メソジスト大学、男子学生社交クラブ、そしてクラリネットであり、1914年には創立されていたことが条件となる。しかし、メソジスト系の大学は、森本あんりが示唆したように、大学設置に積極的でなく創設時期も19世紀終盤と遅い。実在する“Methodist College in Kansas”は、どれもヘミングウェイが描いたテキスト通りの「メソジスト大学」の全ての条件を満たしてはいない。大学の所在地をカンザス州だけでなく、テキストとヘミングウェイ家に関わりのあるオクラホマ州に対象を広げると以下の4大学が候補になる。

- ・ Central Christian College : 1884年にオルレアン神学校 (Orleans Seminary) として設立され、1914年にカンザス州マクファーソン (MacPherson) に移設。そこには Sigma Alpha Iota という女子学生社交クラブ (Sorority) がある。
- ・ Southwestern College : 1885年にカンザス州南部のオクラホマ州に近いウィンフィールド (Winfield) に創設され、1848年にオハイオ州オックスフォードのマイアミ大学で発足した Phi Delta Theta という男子学生社交クラブを源泉として、後の1995年に Theta Phi Delta という男子学生社交クラブが発足している。<sup>32</sup> 全米統一メソジスト大学連合 (National Association of Schools & Colleges of The United Methodist Church (NASCUMC)) の一つでもある。

- ・Kansas Wesleyan University：カンザス州中央部の町サライナ (Salina) に 1886 年設立された。<sup>33</sup> サライナは、カンザス・シティにつながる州間高速道路 70 号線上にある。「ウェズリアン (Wesleyan)」という名前は、メソジズムを 18 世紀英国で興したジョン・ウェスレー (John Wesley, 1703 年 6 月 28 日 (ユリウス暦 6 月 17 日) -1791 年 3 月 2 日) にちなんでいる。ウェスレーは、18 世紀の英国教会の司祭で、その後メソジスト運動と呼ばれる信仰覚醒運動を指導した人物。この運動から生じたのがメソジスト派というプロテスタント教会であり、アメリカ合衆国・ヨーロッパ、アジアで大きな勢力をもつに至った。特にアメリカではプロテスタント系で信徒数第 2 の教派である。聖化を強調し、『キリスト者の完全』を唱えた。これはウェスレー派のメソジストときよめを強調するホーリネスに継承されている。<sup>34</sup>
- ・Oklahoma Agricultural and Mechanical College：オクラホマ農工大は 1890 年に創設された。そこは 1919 年に全米楽団男子学生社交クラブ Kappa Kappa Psi が創設された大学であり、後にオクラホマ州立大学へと改称された。<sup>35</sup>

テキストの情報を総合すると、クレプスの“Methodist College in Kansas”は単独では実在しない。が、以下の組み合わせになる。

Central Christian College は女子学生社交クラブの楽団を持つ。Southwestern College は直接は関係ないが、オーバーリン大学のあるオハイオ州で創設された男子学生社交クラブ Phi Delta Theta が、1995 年にこの大学に設置されたというのが興味深い。Kansas Wesleyan University の創設時期と『兵士の故郷』創作時期に時差的問題はない。オクラホマ農工大 (現・オクラホマ州立大学) (オクラホマ州スティルウォーター) の所在地がオクラホ

---

<sup>32</sup> <https://www.sckans.edu/campus/> 及び [https://en.wikipedia.org/wiki/Phi\\_Delta\\_Theta](https://en.wikipedia.org/wiki/Phi_Delta_Theta) 参照。

<sup>33</sup> <http://www.kwu.edu> 参照。

<sup>34</sup> <https://ja.wikipedia.org/wiki/ジョン・ウェスレー> 参照。

<sup>35</sup> <https://go.okstate.edu> 及び [https://en.wikipedia.org/wiki/Kappa\\_Kappa\\_Psi](https://en.wikipedia.org/wiki/Kappa_Kappa_Psi) 参照。

マである点ではテキストと不一致だが、その Kappa Kappa Psi という名の楽団の男子学生社交クラブがあり、それは 1919 年 11 月 27 日に創設されたことは注目に値する。なぜなら、ヘミングウェイの姉マーセリンがオーバーリン大学音楽学部に入學しているからだ。

これらを総合的に勘案すると、クレブスの実家がオクラホマ州にありカンザス州のメソジスト大学に行った理由が見えてくる。つまり、ヘミングウェイが自らの経験を素にした伝記的創作品 (autofiction) を描く上で、幾つかの偽装を行ったと言える。まず出身地をイリノイ州の代わりにオクラホマ州という同じ中西部の州に、自らは実現できなかった進学先を姉のオーバーリン大学に似せたカンザス州の架空のメソジスト大学に、そして故郷を出た後に向かう街をヘミングウェイが実際に就職したトロントではなく見習い修業をしたカンザス・シティへと転化していると推測できる。クレブスの楽器クラリネットは姉マーセリンが通ったオーバーリン大学音楽学部を連想させる。そのために、『兵士の故郷』では、実在のいくつもの大学が部分的に取捨選択し組み立てられ、ヘミングウェイの実現しなかった大学像を創り出している。

## おわりに

『兵士の故郷』は、史実に基づいた factfiction であると同時に、作家自身の帰郷時の居心地の悪さを偽装によって描いた autofiction である。そしてそこには、ヘミングウェイ自らが成し遂げられなかった大学進学の結果を想像して描いた喪失文学の世界がある。まず、第三次覚醒運動の中心であったシカゴの郊外に実家があり、戦争で学んだ宗教への懐疑を否定することが難しかったこと、若きヘミングウェイの男らしい自我の目覚めのための三種の願望 (自立願望、兵士願望、進学願望) 全てが否定されたこと。そして最後に、家族内でキリスト教宗派の会衆派とメソジスト派が混在し、特に母方のメソジスト派に対して抵抗感が強かったことが挙げられる。これは、テキストの特徴として母の介在と父の不在が絶望的な故郷を作り上げていることから明らかだ。

本作品には、ヘミングウェイの宗教表象が常に信仰を求めながらもそこに到達できないで揺れ動いていた曖昧さの現れのように思えてくる。<sup>36</sup> 一方、これらの矛盾した行動は、創作上の特質として昇華させているようにも思える。ヘミングウェイは、高校卒業、記者から兵士を経て帰郷し離郷、そして就職している。クレブスは高校卒業後に大学進学を果たし兵士となったものの、帰郷は彼を幸福にすることはせず、結局離郷し就職している。「メソジスト大学」という学歴は、ヘミングウェイの親の願望を聞き入れた際の自らの結末を想像して否定的に描いているのかもしれない。高校卒業後の進路をクレブスの世界に想像・創造し、自らの人生を書き換えることにより、親への反抗と自らを諦観する「男らしさの喪失」物語をあらためて演出しているのだろう。

『兵士の故郷』は、メソジスト教育を受け、参戦し、立派な男になろうとしてなれなかった20世紀的な男らしさを実践しようとした男クレブスを描く。ヘミングウェイはクレブスと同世代の自らの経験をクレブスに投射しつつ、「メソジストになりたくない自分」を「メソジストなれなかったクレブス」に創作した。そのために、クレブスはヘミングウェイだという伝記的読みをかわすために、構造的にはオルタナティブな「大学進学」を挿入し架空の大学を作り、内容的には皮肉を込めつつ冷徹な「喪失文学」を描いている。

ヘミングウェイは、クレブスに学歴を与え自らとは違う人生を描くものの、結局は叶わなかった自らの進学を「失敗するものだった」と意図的に喪失を想像して描いているとも言える。大学進学を断念した自らを正当化しつつ、その理由として宗教と戦争を挙げている。作家は、人生のシナリオを想像・創作するも、結局は願望よりも失望が勝る。『兵士の故郷』は、『われらの時代に』に通底する20世紀初期の混沌とした世界へのアーネスト・ヘミングウェイの諦観が映し出されている。

<sup>36</sup> 18. 高野泰志、『アーネスト・ヘミングウェイ、神との対話』。松籟社、2015年。

## 参考文献

- 高野 泰志. 『アーネスト・ヘミングウェイ, 神との対話』. 松籟社, 2015 年.  
日本ヘミングウェイ生誕 100 年日本委員会編 『ヘミングウェイ年譜』, 1999 年.  
森本 あんり. 『反知性主義: アメリカが生んだ「熱病」の正体』. 新潮選書, 2015 年.  
山我 哲雄. 『キリスト教入門』. 岩波ジュニア新書, 2014 年.  
山本 健一 『ヘミングウェイ文学の潮流一人と作品』. 岐阜市立女子短期大学研究紀要第 61 輯 (平成 24 年 3 月), 9-16.  
Azevedo, Carlos. "Oak Park as the Things Left Out: Surface and Depth in 'Soldier's Home.'" James Nagel, ed. *Ernest Hemingway: The Oak Park Legacy*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1996.  
Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: The Writer as Artist*. Princeton, New Jersey: Princeton UP, 1952.  
———. *Ernest Hemingway: A Life Story*. New York: Charles Scribner's Sons, 1969  
Giles, Paul. *American Catholic Arts and Fictions*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.  
Grimes, Larry. "Hemingway's Religious Odyssey: The Oak Park Years" *Ernest Hemingway*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1996.  
Hemingway, Ernest. *In Our Time*. 1925/30. New York: Scribner, 1996.  
Hovey, Richard B. *Hemingway: The Inward Terrain*. Seattle: U of Washington P, 1968.  
Jones, Horace P. "Hemingway's Soldier's Home." *Explicator* 37.4 (Summer, 1979): 17.  
Lynn, Kenneth S. *Hemingway*. Cambridge, Harvard UP, 1987.  
Mellow, James R. *Hemingway: A Life Without Consequences*. Cambridge, MA: Da Capo P, 1992.  
Monteiro, George. "Hemingway's 'Soldier's Home.'" *Explicator* 40.1 (Fall, 1981): 50-51.  
Nagel, James, ed. *Ernest Hemingway*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1996.  
Reynolds, Michael. *The Young Hemingway*. 1986. New York: Norton, 1998.  
Rudolph, Frederick. *The American Colleges and Universities*. [アメリカ大学史]. Athens: U of Georgia P, 1962. Trans. 阿部美哉, 阿部温子. 玉川大学出版部, 2003.  
Smith, Paul. *A Reader's Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Boston: Hall, 1989.  
Stewart, Matthew. *Modernism and Tradition in Ernest Hemingway's "In Our Time"*. Rochester, NY: Camden, 2001  
Imamura, Tateo. "'Soldier's Home': Another Story of a Broken Heart." *Hemingway Review* Fall 1996: 102-07.  
"Religion (Congregationalists, Methodist, etc.)," "Universities," "WWII," etc. *Wikipedia & HPs*.